62

チャタア・ボックス・3

淀川 長治
〈映画評論家〉

A「こないだ〝サンデー毎日〟で沢村貞子さんいいこと云ってたねえ」
B「どんなこと」
A「テレビ局の喫茶店でプロデューサーが十六才の女子高校生を紹介したんだって」
C「女優になりたァい……て云うんだろ」

「ロッキー」で話題をよんだ大型新人男優のシルベスター・スタローン。
単なるボクシング映画ではなくアメリカン・ヒューマニズムを描いた作品。

A「そうじゃないんだ。きれいな子なんだ。
それでプロデューサーも女優にしてやろうと思って沢村さんに紹介したらしんだ。それで沢村さんが……聞いたんだって。役者という仕事は見かけは華やかだけど辛いものよ。けれど好きで選んだ以上……ここまで云たらその子、首をふって……別に好きじゃありません……と云ったんだって」
B「プロデューサーに口説かれたのかい」
A「ところが、そうじゃないんだねそれが」
C「母親の野心のスイセンなの」
A「ちがうんだ。この女の子、こう沢村さんに答えたんだ。自分の可能性をためしてみたいのです。これでこのあと沢村さんすっかりクサッタんだ」
B「ひどい子だねェ」
C「ろくに芸も出来なくてもスタアになっちまう。だからそんな子が出てくるんだよ」

× ×

B「その反対の話がある」
A「いい話なの」
B「これがいいんだね。尾上多賀之丞。このひともう九十だよ。六代目の相手のころ、大阪の梅玉、東京の多賀之丞といいたい名女形だった。この人がもう年なのでまわりも心配して無理をさせない。それが御本人はちがうんだね。舞台に出たくって出たくって」
C「見たよ。こないだ歌舞伎座の〝市松小僧の女〟の二

幕目、幕が開くなりこの人が農家の家の庭をほうきで掃いてんだ、びっくりしたね。梅幸と又五郎のだしものなんだ。名優多賀之丞が農家のばばァというそれもちょい役で、幕が開くなり舞台で一人で庭を掃いてたからアレッと思ったよ」

B「実はあれはね、あの原作・演出の池波正太郎さんにわたくしちょい役でもいいから出たいねェとたのんだんだって」

A「いい話だ」

× ×

A「東京で〝アドベンチャー・ファミリー〟が馬鹿当りしとるね」

B「東和が無茶苦茶にゼニをかけてこれを宣伝したからだよ」

A「だけど、きれいな大自然の風景、アメリカの開拓当時の生活、それと動物たち、これが今日の公害をさけての一家の物語というので……やっぱりこれ私たちのあこがれよ」

C「この映画のイカダに親子が乗って川をのぼるポスター、それとこの映画の〝アドベンチャー・ファミリー〟のそのファミリーでこれが〝スイス・ファミリー・ロビンソン〟の焼き直しということすぐわかった。それにこの一家の名がちゃんとロビンソンなんだもん」

大自然が素晴しい「アドベンチャー・ファミリー」

A「まあそんなこと知らなくったっていいけどさ。それがちょいとすぐわかることの方が面白いんだよねェ。アメリカじゃすぐそうわかって……それじゃ面白いぞ……そう思って見にゆくんだよきっと。ポスターや宣伝写真もそれを意識して作ってあるもん」

× ×

B「映画を子供が独占してしまった」

C「そうじゃなく大人が映画から離れてしまった。大人は何をしとるんだろう」

A「ゴルフだよ」

B「〝ダウン・タウン物語〟がヒットしたのも映画がジャリで見る客がこれもジャリ。それで当たった」

C「本当はあれはれっきとした大人の映画なんだよねェ イギリスのミュージカルの本物の感覚なんだ。舞台はアメリカのギャング時代だけどさ」

B「いまでも腹が立つのはアッテンボロー監督の大人の男のミュージカル〝素晴らしき戦争〟が無惨にコケたこと。それからケン・ラッセル監督の〝ボーイ・フレンド〟がコケたこと、これは口惜しい」

A「どちらもイギリス製の本物のミュージカルだというのに惜しい」

× ×

A「最近はブライアン・デ・パルマ監督の〝キャリー〟とジョン・G・アビルドセン監督の〝ロッキー〟がいいね」

C「アビルドセンは兵隊がえりの中年男の今日の若者への怒りをぶちまいた〝ジョー〟（一九七〇）の監督だろ」

B「アメリカにはつぎつぎと新人のいきのいいのが現われるからたのもしいねえ」

A「もうジャリ相手のボルノ気どり映画はたくさんだよ。日本の監督さんよ」

女体百景

57

F画伯の女

文とえ 細川ただす

過日私は、F画伯の絵の展覧会を見に行った。彼のかく女は、その小さくうすい唇が口元をひきしめている。陶器のような薄い肌という、細面の真中に鋭く通った鼻すじといい、みるからにあの部分のしまりのよさのシンボルのような女である。

事実こういう女は、しまりがいいに違いない。

しまりのよさへのFの憧れが画面一杯に、にじみ出ているのだ。

芸術は、憧れの表現なのだから、しごく当然のことである。

たしかに彼のかいた女を見ていると、私は、何ともいえぬ緊張感におそわれる。

あの「女」にしめつけられた経験を持つ男だけが感じるあの緊縛感だ。

「ははあ彼はこのモデル女を知った上で書いているな?」と、私は直感するのだ。

自分とモデルとの区別がなくなり、同一と化する境地を哲学者の西田幾多郎は、絶対矛盾の自己同一といい、また純粋経験とも呼んだ。これは禅の境地でもある。

えかきとモデルの場合だって同じだ。えかきがモデルと同一と化して始めていい絵がかけるのである。人の心を打つ絵がかけるのだ。

△如何にして、えかきとモデルとが一体化するか?▽ここに、えかきの苦労があるのだ。最近、絵かきの仲間入りした私は、F画伯の苦労がよくわかるのだ。男の苦労が!

パリジェンヌの何人かと結婚もし、また、何人かと交渉をもったF画伯は、体はおろか、心までパリジェンヌと通わせた上で、彼独特のあのパリジェンヌの絵をかいたのだ。

さかのぼって、ルネッサンスの画家達は、当時こぞってモデル志願してかれらの前にその美しい裸身をさらした王侯貴族の若い夫人達や、高級娼婦達と、身と心をか

よわせたという。興致れば、彼等は、アトリエの一隅で彼女達をかき抱いた上で、再びカンバスに絵筆を走らせたのだ。趣味や道楽で女を抱くのなら苦労はいらぬ。

しかし、絵かきは絵をかくのが商売だ。

何が何でもかかねばならぬ。

「ここしばらく、インポでさっぱりだめなんだよ！」などと、のんきなことをいってはおれないのだ。おまけに、ヨーロッパの性にめざめた女達が相手とあっては、ルネッサンスの絵かき達は大変である。

彼女達は、一回はオードブル、ダブルヘッダーは儀礼的な紳士の回数、三回が淑女のつとめ、四回は妻の権利と心得ている連中である。

こんな連中に迫られるとあっては、現代のインポ男達にとっては気の遠くなるような話である。

よほど精力絶りんでなければ絵かきはつとまらないのだ。それ相応の努力をしなければならないのである。

このようなルネッサンス期の画家の一人、フィレンツエ派のボッチェリーは、その名作「ヴィーナスの誕生」で有名な作家だが、F画伯が、このボッチェリーを必死で勉強したことは有名な話だ。

そして、F画伯がボッチェリーから学んだのは、小手先の技法だけでなく、何よりも、その作画態度そのものだったことは、彼のパリでの生活が何より有弁に物語っている。

酒をのまないFは、上質のブランディーを一滴、ブランディーグラスにたらし、舌なめずりを二、三回して、もうよったふりをし、おどけて、

「おれは酔ったぞ！　だから、これから、おれは、わい談をするぞ！」

と、前置きして、わが師、I画伯相手に、わい談を始めたという。

「君、パリジャンの硬いまんこうを数多く相手にしようとすれば、やはり、日頃からきたえておかなければいけないよ！

君、彼女らのあそこは、硬いんだから。絵かきたるもの僕達もチンポウを鍊えておかないとだめだよ！」

と。

私の乏しい体験に照しても、パリジェンヌが概して硬まんこであることは、F画伯に同感だ。

あるいは、F好みの女がそうであり、私の好みの女のタイプと一致しているのかもしれない。

いらんことをいわず、話を元に戻そう。

「どうして鍊えまんねん？」

と、I画伯が尋ねると、

「そりや君、金ずちだよ！」

と、F画伯。

「へえ？」

「金ずち！」

と答えて、Fは、壁にかけてある数種の金ずちを示し、その一つを手にとって、はだか踊りよろしく、I画伯の目の前で実演をして見せたという。

「かなずちを風呂へ入るとき持ってはいるんだよ！　そして、ホースで水をシンボルめがけてあてながら、こんこんこんと打つんだよ！

余り始めから強く打ってはいけない。

適度ということが大切だ。

そうでないと血が出るぞ！

最初は小さな金ずちから、だんだん大きなのに変えていくんだよ！」

と。

この話を最近I画伯から聞いた私は、かたまんこに対抗すべく、風呂へ入る時は、かならず金づちを持って入ることにしている。

何故なら、私もいつか緊縛感に満ちた女をかきたいから。

★ローズウッドとワインカラーの〝バランタイン〟

ドリンク＆レストラン〝ベルビュードール〟が三月一八日、ティー・ワイン＆レストラン〝バランタイン〟として新装オープンした。

これまでの黒を基調とした店とはガラリと雰囲気を変え、全体をローズウッドとワインカラーで統一、神戸らしいファッショナブルでシャレたムードになって若い女性やアベックなどに好まれそうだ。

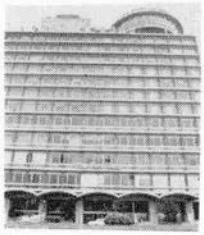
趣好をこらしたディナーがあり、「バランタイン」を中心に洋酒を楽しめる。近々、ワインカラーで仕上げたグランド・ピアノの演奏も入る予定だ。

一方、ブティック「パレーホープル」の仏、伊から直輸入の舶来雑貨・アクセサリーのショーケースをおき即売もする。近い内に昼間も開ける予定だという。

5：00PM～1：00AM
神戸市生田区中山手通二―一〇―一
大洋ビル2F ☎三二一―五六七七

★一ポンドの神戸ビーフはいかが？

「ニューポートホテル」（三宮フラワーロード）の屋上にある回転レストラン「鳴門」が四月一日から五月三十一日まで〈ステーキ・フェスティバル〉を開催する〝一ポンドの神戸ビーフステーキが誕生〟と銘うって、一ポンドから⅓ポンドまでお客さまの食欲に成じて九つのランクがある。


ニューポートホテル

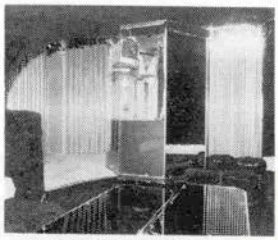
一ポンド（450g）一万円、400g九千四百円、350g八千五百円、⅔ポンド（300g）七千五百円、250g六千五百円、200g五千八百円、200g五千三百円、180g四千八百円、⅓ポンド（150g）四千円。

シャンピニオン、ピアネーズ、テリヤキなどで、ソースも六種類ある。グループで行けばお得ですよ。

午後五時から九時三〇分
でんわ二三一―四一七一㈹

★ディスコ・サウンドで踊ってみませんか

最近のポピュラー音楽界では旧作をディスコ・アレンジで再ヒットさせたり、ディスコ熱は相変わらずだが、このほど神戸・花隈に「ディスコラウンジ45（フォーティ・ファイブ）」がオープンした。


洞くつのようなビジタールーム

スティールパイプにかこまれたシルバーグレーの世界……。そして、大人のムードで遊べる漆黒の洞くつを連想させるビジタールーム。レコードも揃っている。

店長の白川隆さんの話では、とにかく内装に凝り、スティールパイプの使い方に色々と頭を使ったとか。

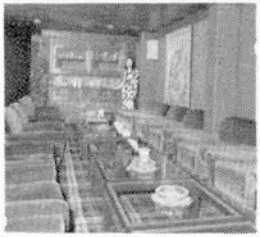
新しく生まれ変った「45」で踊ってみませんか。

一人ワンセット二千二百円、ボトルキープ四千五百円、水割五百円
ソフトドリンクス五百円
神戸市生田区花隈45
☎三四一―二八四五

●神戸うまいもんとドリンキング

スナック
聚利（シュリ）
生田区下山手町二丁目八（三宮・農業会館東）
☎三二一―〇二六〇

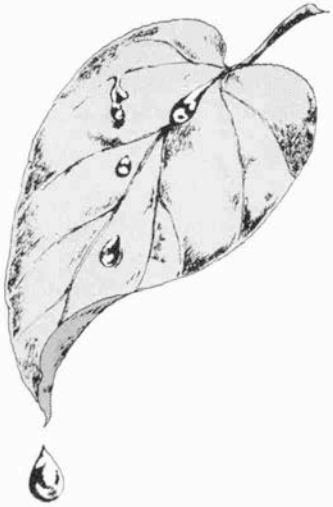
ママは実にサバサバとした感じで、どちらかというと割烹料理屋の女将といった気風のいい人。つき出しひとつにしても真心のこもった手づくりの〝田舎料理〟。それに京都から直送される漬け物も自慢の一つ。料理に舌鼓を打ち、いい加減飲んでも思ったよりズッと安い。こういう店だからシックで豪華な造りに似合わず、いつも和やかで家庭的な雰囲気に満ち満ちている。



三階にはゆったりとくつろげるソファがセットされているので会議や商談にも向いているし、25名までのパーティも可。

fresh!

フレッシュな製品をつくりお届けするのが私達の役目です



取扱品目

牛　　乳　ソフトミックス
生クリーム　コーヒー用クリーム
ケーキ用クリーム　各種アイスクリーム

株式会社
六甲牧場

神戸市灘区篠原南町6丁目1-25 ☎神戸078(801)6000(代表)

ホテルルミノはま 直営店

日本海直送の
活魚料理

日本海でとれた新鮮な旬の魚を直送便で……その魚を皆さまのご注文に応じて熟練の調理士が盛りつけます。

お1人さま 3,000～6,000円

日本料理の店
瀧沙羅（ばさら）

電話(078)321－6363
神戸・三宮阪急西口北側レインボープラザ1・2F

あなたを創造する場……

会員募集中!!

◆入学随時　◆お問い合せは、お近くの文化センターへ

- 美容バレエ
- 陶芸
- アートフラワー
- キャンドル
- 彫金
- 日本舞踊
- 組ひも
- スタイル画
- 詩吟
- いけばな
- シャンソン
- 押絵
- 紙人形
- ピアノ
- 日本人形
- 木目込人形
- きもの着付け
- 和裁
- 手あみ
- ソシアルダンス
- パンフラワー
- 児童絵画
- 洋画
- 箏曲
- 三絃
- バレエ
- 整美体操
- フランス刺しゅう
- ペーパークラフト
- フラワーデザイン
- 煎茶
- 児童合唱
- 茶道(裏)
- バイオリン
- 革工芸
- 香水
- 児童機械体操
- 音感
- 洋裁
- ヨガ美容体操
- 書道(漢字)
- 書道(カナ)
- 書道(こども)
- ペン習字
- 篆刻
- 茶道(表)
- 七宝
- レジンフラワー
- 英会話
- ギター
- 小唄
- 日本画
- 声楽
- 木彫
- 英語
- 民踊・新舞踊
- 作法
- 三味線(小唄)
- 謡曲・仕舞
- 尺八
- 三絃(地唄)
- 欧風刺しゅう
- 裏絵
- 真多呂人形
- つまみ絵
- こども英会話
- 田舞
- 袋物工芸
- エレクトーン
- 筑前びわ
- 珠算
- 盛物
- スチュワーデス養成科

嵯峨御流文化センターグループ

元町プラザ文化センター

神戸市生田区元町通2丁目1　元町プラザビル6階
国鉄元町駅(西口)南側　☎(078)331－6439・7453

鈴蘭台プラザ文化センター

神戸市北区鈴蘭台北町1丁目10-2 鈴蘭台プラザビル4階
神戸電鉄鈴蘭台駅下車北へ3分　☎(078)593－3412

西鈴蘭台文化センター

神戸市北区五葉1丁目1の1　神鉄西鈴ビル3階
神戸電鉄西鈴蘭台駅下車前　☎(078)592－1404

サンモール文化センター

高砂市高砂町字栄町373番－7　サンモール4階
山陽電車高砂駅下車南へ3分　☎(07944)3－0817

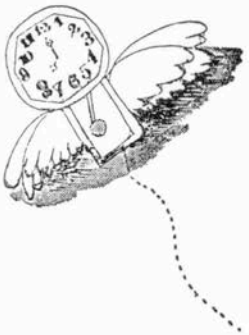
山陽文化センター

神戸市長田区北町2丁目1　山陽長田ビル3階
神戸高速長田駅下車地上　☎(078)576－3855

あまもく文化センター

尼崎市東難波町5丁目18番10号　あまもくビル5階
阪神電車尼崎駅下車北へ5分　☎(06)482－7182

神戸百店会だより



★新作に人気集中の タサキコレクション

'77タサキ新作コレクションが3月9日から3日間、オリエンタルホテルで開かれた。〝色華やかに〟をテーマにカラフルな新作のデザインネックレスやペンダントを発表。お値段の方は3〜4割アップということで二〇〜三〇万円代のものか五万円以下のものに人気が集中したようだ。この展示会も定着し、回を重ねるごとに若い女性客が増えてきている。

外人さんも思わずうっとり

★子供の生活を大切にした子供らしい服を

3月7月から11日まで貿易センタービル23階で**'77年ファミリア秋冬物受注会**が催された。コーディネイターの清水さんに今年の傾向を伺ってみると「大人のマネではなく子供の生活の原点にもどった子供らしい服や自由自在に組み合わせのきく、全シーズン利用できるものですね。色は明るい紺、ブルー、グレー、ローズ系の赤などです」秋冬物は9月頃より、ほとんど値上げもなく各店のショーウインドウにお目見えです。

★光の中へでかけましょう

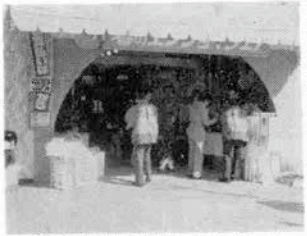
4月。イースターも近ずいて春の帽子がはなやぐ季節。3月4日(金)5日(土)の2日間トアロード〝マキシン〟の'77春〜初夏の新作発表展示会が開かれました

明るい季節にふさわしいピンクや白の帽子。少し帽子のつばが左右アンバランスになった形がしゃれています。いずれも、はなやかで上品、シックでやさしいイメージを大切にした逸品ぞろいでした。

「この春にはこんなお帽子はいかが？」

★はなやかに〝ありがとうフェアー〟開催

さる3月12日(土)と13日(日)の両日、**ナショナルシヨウルーム**でナショナルクレジットありがとうフェアーが開催された。ナショナルの電化製品を日頃利用しているお客さまへのサービスということで記念品や数々の賞品が渡されたり、エレック料理の実演試食コーナーも設けられ、休日ということもあって多くの家族連れで賑わっていた。



活気のある〝ありがとうフェアー〟

●ショップトピックス

★創業百年を迎えた**本高砂屋**ではこれを記念して「菓匠本高砂屋」のぼんぼりに赤毛氈、桜といった春のムードが一杯のお茶会を開催

★元町3丁目の**凧月堂**は現在改築中、この秋5階建のビルになってオープンする。新製品の「神戸名物酒月万頭」はホカホカのまま店頭で売っています。甘さをおさえた大人の味。一度ご賞味下さい。

★神戸オリエンタルホテル

伊勢功一ディナーショー

4月28日(木)5時　12000円

ラブパラードを中心にスタンダードから歌謂曲まで幅広く、カプリコーンをバックに甘い歌声をお楽しみ下さい。

★4月末にオープンするサンロイヤルプラザに百店会から出店するお店を紹介しましょう。

現在国際会館一階アーケードにある宝飾のミキモトとベニー毛皮店です。

ミキモトは真珠で世界にその名を轟かせていますが、今度の店は輝石を中心にした一味違ったミキモトです。24坪の店内は明るくしかもハイセンスなムードが特徴です。

ベニー毛皮店は7階に20坪で従来通りのベニーオリジナルや直輸入ものといった商品構成。サロン風なムードでゆっくりとお話をしながらお買物を――という趣向。また10階に12坪のバラエティショップベニーもオープンする。こちらにアクセサリー、香水、衣料品(シーザー社)置き物など楽しい小物が一杯の若々しい雰囲気でお気軽にどうぞ。

神戸の老舗がオープンする新しい店にぞうご期待！

★さる二月十三日にメープル不二屋の取締役社長吉田裕子さんが死去され吉田俊夫氏がこのほど取締役社長に就任された。メープル不二屋・東京の代表取締役には後藤雄一郎氏が就任。

ポケットジャーナル

★神戸まつりパレードは5月15日午後3時まで

いよいよ第七回目の神戸まつりがやって来た。

今年の神戸まつりのキャッチフレーズは創るよろこび、参加する楽しさ、あなたの——神戸まつり。ということである。

神戸まつりのメインエベントである神戸まつりパレードの募集要項が決まり既に応募者が集ってきている

今年度のパレードは正午開始で午後三時には切上げることになっており規模は去年の半分程度になる。

パレード参加団体も今年は50団体に抑える方針。

パレードの内容は▽ミナト神戸らしい国際色豊かな各国の民族衣裳の在神外国人行進などのパレード▽仮装行列や音楽行進、バトントワラーなど、若さ溢れる楽しいパレード▽みこし、だんじり、民踊などの郷土色豊かなパレードといったもの、参加申込は既に締切っているが4月5日（火）まで。

今年から、仮装パレードやこどもパレードが新しい企画。5月14日のフラワーロード一帯の催しは今年は実施しない。5月15日のパレードだけとなっている。

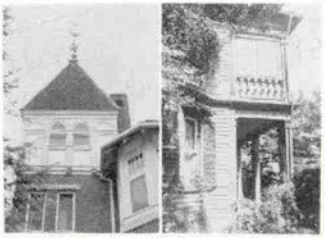
昨年の神戸まつりパレード風景

★北野町の二つの異人館が市民のオアシスに

全国から観光客を集めている北野町界隈の異人館も現状は次々と建て替えられたり開発されているそこで美しい街並み保存に力を入れている神戸市が、大切に保存することと市民の憩いの場になることを目的に、五十二年度予算案で二つの異人館を買収することになった。決まったのは北野町の現在中華同文学校の研修寮になっている〝風見鶏のある異人館〟こと旧トーマス邸と旧ドリュウエル邸。

ドリュウエル邸は案内コーナー、レストルーム、集会室などを設けた「異人館センター」に、庭園はオアシス公園に利用する予定。

トーマス邸は開港以来神戸に住んだ外人の家具、調度品、資料などを展示した「異人館ギャラリー」に。新しい神戸の名所として話題をよびそうである。



旧トーマス邸と旧ドリュウエル邸

★開館20周年を記念して「森の水槽」新設される

神戸市立須磨水族館ではことし開館20周年を記念して、現在の9つある水槽を補強する改修工事と、全国

誕生日ありがとう運動

「五つ子さん」も本運動にご参加!!

みなさん、よくご存知の東京の「五つ子さん」が、本運動にご参加くださいました。一月三十一日は、山下福太郎・寿子・洋平・妙子・智子ちゃんの誕生日でした。おとうさんの山下頼充さんから早速多額の献金が送られてきました。本部からは、本運動の参加カードを送って、お礼を申しました。

この幼児カードは、

山下福太郎さま
昭和五十一年一月三十一日
おたんじょうびおめでとう。
あなたは、一三二一一九ばんめのきょうりょくしゃです。
あなたのやさしいこころとげんきなからだが、みんなとともにすくすくせいちょうしますように。

この五つ子さんの本運動参加のきっかけは、本部から「誕生日のお祝いの手紙」を出したのに、お応えいただいたものです。

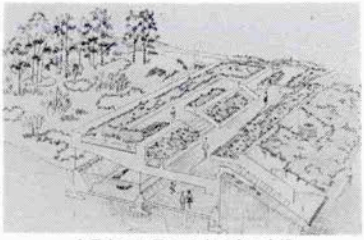
今までも、この「誕生日のお祝いの手紙」がきっかけとなって、たくさんの知名人が、本運動に共鳴していただき、ご参加いただいています。最近到着便で知名の方は、桂米朝さん（落語家）西郷輝彦さん（歌手）桂三枝さん（落語家）林与一さん（俳優）などです。

みなさんも、あなたの誕生日には、ぜひ、本運動にご参加いただき、今年の誕生日をいっそう意義づけてください。

誕生日ありがとう運動本部
神戸市葺合区御幸通八—一—六
神戸国際会館一階の郵便局の隣
電話二五一—八一六一内線三一六

でも初めてという「森の水槽」が新設される。

「森の水槽」は、本館南西わきに建設され、水槽室全体を森の中に埋めた半地下構造で、水中部分と、水上部分が同時に見える半水位の水槽。巾10m、奥行5mの大水槽2個にはアマゾン川の巨大魚ピラルクを中心とする南方系の魚と、シベリアのチョウザメを中心とする北方系の淡水魚が収容され、水槽の背景が都市公園の森となり、人間都市神戸のまちづくりの一環として、建設費約一億円をかけて六月末にお目見えする予定。



6月末にお目見えする森の水槽

★ラジ関25周年の記念植樹行われる

地元のコミュニティー放送を目指す「ラジオ関西」（本社須磨区、升田武雄社長）は4月1日、創立25周年を迎えるが、去る2月23日午後2時から創立25周年記念植樹が行われた。

寒風のなか、国民宿舎「須磨荘」東側での式は、まず升田社長があいさつ、続いて狩野学神戸市助役が「今日これから植える黒松10本は人間でいえば20歳位の若さ。次の世代をしょって行くわけで、成長して将来の神戸の名物になって欲しい」とのべ、神戸市立星陵台保育所の長田仲良し子供会の子供たちの手によって「ラジオ関西の森」の記念碑（小豆島の石を使用した高さ120cm、巾100cm）が除幕された。そのあと、升田社長、狩野助役らが植樹を行った。

なお、この記念植樹目録の贈呈は4月1日、電リク25時間「すばらしい仲間たち」の最後を飾って行う。

ラジオ関西の森除幕式

★使うほどに味のでる手造りを発表

染織工芸〝木々の会〟が初めてこの作品展を、4月28日から5月3日まで、着尺、服地、インテリア用品などそろえ、ギャラリーさんちかで開催する。〝木々の会〟は女子美術大学工芸科の卒業生によるグループで現在のメンバーは、中野扶美子、米村昭子、山本和子、足立靖子、杉木京子、原真由美、村上美和子の8名。実用性があり、使うほどに味のでる作品づくりを目指す、織物と染めのグループである。

連絡先／石見紀子 ☎0720－57－1470

"木々の会"は4月28日からです

★鈴木漠第五詩集「風景論」上梓さる

ヴェルレーヌの「月の光」の冒頭の一行、〈貴方の魂は選ばれた風景だ。〉という美しい詩句を漠に献じたい――とは、塚本邦雄氏が鈴木漠第五詩集「風景論」によせる「星辰史」のなかでのべていることである。

「『見る』ことに執し、かつ努めましたが、眼から語への、そして言語からふた

美術ガイド

★兵庫県立近代美術館
兵庫県立近代美術館名品展（常設展・洋画と彫刻）4／1～4／17
橋本関雪展 4／23～5／22

★南蛮美術館
南蛮紅毛美術展 4／2～5／29

★白鶴美術館
日本の古美術 3／15～4／17
中国陶磁 4／21～6／5

★大丸神戸店美術画廊
萩・備前の名陶第3回春秋会展 4／14～4／19
'77エコールドパリ絵画展 4／21～4／26
現代巨匠彫刻展 4／28～5／3

★そごう神戸店美術画廊
第2回現代洋画秀作展 4／15～4／20
佐野弘利油絵新作展 4／22～4／27

★三越神戸店3階アートギャラリー
矢部篤郎作陶展 4／5～4／10
松本奉山水墨画展 4／12～4／17

★さんちか広場
第2回直輸入盤フェア 3／31～4／5
神戸女流いけ花作家展 4／7～4／12
元町文化学院展 4／14～4／19

★ギャラリーさんちか
一陽会関西作家展 4／7～4／12
播磨石仏作品展 4／14～4／19
KOBE二紀女流作家展 4／21～4／26

★KCCギャラリー
夙川学院短期大学写真展 4／10～4／16

★KCCアートギャラリー
伊差川洋子染色展 4／7～4／13
吉岡一展 4／15～4／26
萬古焼茶陶展 4／28～4／30

★ABC開発ギャラリー本田（心斎橋大阪ガスショールーム東）
細川 章洋画展 4／2～4／6

鈴木　漠氏

たび視覚への転換の不可能性、つまりは詩そのものの至難さにほとんどうちひしがれる思い」（あとがき）で上梓したこの詩集には、本誌「ポエム・ド・コウベ」掲載の「樹木のある風景」など20篇が収められている。

四六判、92頁、限定三百部。千八百円。書肆季節社刊。

★〝親と子の絵画教室〟気軽にご参加を

芦屋JC5周年の記念事業業の一環として、のびのびと親子が対話できるような場を――と〝親と子の絵画教室〟を開校した。

2月から7月までの半年間で毎月2回、入会金及び会費は一切無料。随時三人の先生が指導します。お申し込みは078―451―3572若林まで。

「絵画教室」で遊ぶ子供たち

★マリン・ショップ誕生

味で有名な「くれない」の小畑雛子さんが3月13日インテリア船具、マリンアクセサリーの店「キャプテン・ドレイク」をオープンした。英国船、エジンバラキャツセルの解体部品を中心に、霧笛、72インチの蛇輪、ベルなどの大きな物から灰皿キーホルダー等の小物までマニアはもちろん子供さんも楽しめるミナト神戸にふさわしい店。

4月14日（木）から京都の高島屋でこれらの船具の展示即売会が催されます。興味のある方はぜひどうぞ。

トアロードソニーショップ東入ル　☎331―2165

ユニークなマリンショップ誕生

花時計

〝神戸まつり〟は地域に分散拡大

暴走族騒ぎに禍されて低迷する「神戸まつり」は今年も実施されることになった。

とかく、騒ぎの起りやすい三宮、市役所周週の混雑を避けるためにも、従来、フラワーロード一帯に集中していた催し会場を分散、規模も縮小して実施されるようだ。

したがって各区でひらかれる広場は多少ともに盛大になる様子である。

つまり、神戸まつりは地域に分散されて拡大していっていると見ていい。

形式としては当を得ていると思われるが、実際には、祭の本質からますます遠ざかって行っている感じはまぬかれない。

守勢一方の様子が浮き彫りになってきて、何か祭りが悪者あつかいになってきた風汐さえ見える。

聞くところによれば、市民祭協会があり、神戸まつり実行委員会があり今年はその中に運営委員会が組まれて充実した組織になってきている。

それほど、市民組織がしっかりしてきているのになぜか祭のエネルギーが出てきていない。

こんな、文化的な催しが行政主導型になっては催し全体が沈滞して遂には消滅するということを関係者は充分知っておかねばならない。　＜Y＞

●KOBE POST

★京都のタウン季刊誌「きょうと」が生まれて二十年余。**国分優子**さんの流麗な筆と編集、いつも楽しみだった**葛西誠**さんの写真ページや表紙絵などで、四季の京だよりを拝読していましたが、二月をもって廃刊とお知らせがありました長い間ごくろうさま。清しい京都の先輩タウン誌の編輯人のみなさんに……。

★芦屋の**G・グラック**さんが、イラン国より民芸の本の出版の依頼をうけ、原色図版300余点、白黒版100余点挿入の416頁の「ASURVEY OF PERSIAN HANDICRAFT」を完成。3月11日～14日自宅でサインパーティとペルシャ民芸と古陶のホームセールを開きました。芦屋市西山町149　☎0797（23）2665

★万博のブリティッシュコロンビア館の時に、開館閉館、結婚式などの神事を頼まれた生田神社の**加藤隆久権宮司**がこのほど「神事芸能使節団」としてカナダへ招かれ5月20日～6月4日の間、カナダアメリカ各地で、**生田獅子保存会**＜**中井一夫会長**＞の神楽と舞楽、**二葉会**＜**児玉利夫会長**＞の神戸太鼓、**武館道場**＜**原義枝場長**＞の詩舞、**旭堂会**＜**柴田旭堂会長**＞の筑前琵琶などを披露することになり4月7日午後5時より〝生田森の観桜と壮行の集い〟の会が開かれます。会費3500円。

★十年余にわたってラジオ関西で放送を続けた「**ラジオによる人間学講座**」は三月末をもって終了。3月31日午後5時30分よりラジオ関西ホールで「人間学のつどい」が開かれました。会費5000円

★王子動物園の**亀井一成**さんが、集英社より動物シリーズより、北国の帝王というタイトルの中に、「ふたごのチンパンジー」¥320を2月15日発刊しました。

世界最高の品質を
誇るアラガワの支店

いろいろなパーティーを
ご予算に応じてどうぞ

レストラン
砂時計
12：00PM～9：00PM
ランチタイム
12：00AM～2：00PM
（年中無休）
生田区山本通1丁目35
東洋ハイツ1階
TEL 241－1857

潜り戸を通って
“花”のおふくろさんの味を

●こん立て●
たかのり弁当
やよいの里
花そうめん
みむろそうめん
天ぷら
おつくり
湯どうふ

和風季節料理 花
11：30AM～8：00PM 月曜日定休
さんプラザ地階 ☎331－0087

〈第一回神戸女流文学賞受賞作品 1〉

ペットの背景

小倉 弘子
え・題字／南和恵

石垣に挟まれただらだら坂を下ると、たしか目的の四つ辻に出られるはずであった。

とは思っても、記憶の中ではこの坂道は、もっと細くて傾斜の強い道として印象づけられていた。訪れる目的も、近くに行く機会もないまま、加奈子の思い出の中では、忘れられたような人通りの薄い坂道が、現実にあったのかどうかも、おぼつかないほど遠いものになっていた。

が、一度だけ、この道をはっきり夢に見たことがあった。ちょうど冬期オリンピックのあった時期での、加奈子はスキーのジャンプ競技に魅せられていた。

空中へ飛翔した選手が、はるか下方の白い雪の拡がりを眼に入れて、躯で空を切っている爽快感を見せながらそのくせサングラスで覆われた瞳が、救いを求める呪文を唱えているような、そんな孤独さを加奈子に感じさせたのだった。

月の障りの前触れのせいだったかもしれないその夜、この坂道の上の虚空を切って、加奈子は夢の中で飛行していた。風の抵抗や空気の唸り声の、頬を裂く冷気の感じが、みぞおちのあたりに切なさを与えていた。視野は雪景の明かるさと異り、見渡す限りが黒い世界だった。それでも暗さの尽きたことでそれとわかる地平線から、無明の細い坂道にかけて白い筋が一本延びていた。風に吹きあおられながら、加奈子はその筋を目標に飛んでいたのだった。

目醒めた後に動悸が残っていた。

今見ると、夢の中に見たよりも、もっと遠い地平の果てに、加奈子が通った高校の傍の木立が見える。

駅前通りから、放射状に分かれる道路の端の道、それは昔加奈子が通っていた頃は、ひっそりとした屋敷通りに続く道路であった。

学校帰りに通っていたといっても、始終ではなかった。少女期の気まぐれに、家の方角とは半円型になる廻り道を、抜けて帰ったことが二度か三度あるだけであった。

その頃はまだこのあたりに焼け跡があり、黒く焼けただれた石垣の崩れ目から、コスモスの花が薄い花弁を覗かせていた。空襲の跡かたはさすがに片づけられてはい

たものの、それでも露出した水道管が土の上を這い、赤レンガで囲まれたかまどが、すすけた石灯籠の傍にうずくまっていた。加奈子はよくそんな庭を覗きこんで歩いた。広い敷地には、たいていバラック造りの母屋がポツンと建っていた。もう戦後三、四年は過ぎていたのに、いつまでも荒れ放題の屋敷跡や庭が、かえって戦火に会う前の広荘な家の造りを、加奈子に想像させた。

何十年も前の思い出を辿りながら加奈子は苦笑していた。他から見れば、さも用のありそうに見える自分の顔つきがおかしかった。

ここまで電車を乗りついでやってくるのに、たしかな目的を胸に持っていたわけではない。

夫の休暇が切れて自由な時間が戻れば、やりたいこともあったし、行きたい場所も二、三は考えていた。が、今日家を出た衝動はまったく唐突としかいいようのないものだったと、加奈子は歩を運びながら考えた。

今朝のことだった。祥二がいなくなって、急に広くなったように感じられる隣の部屋を、加奈子は次の間から見ていた。

大きな窓に面したその部屋は彼のお気に入りの居場所で、天気の良い日はカーテンを透かして陽光が眼に滲んだ。その明かるさに向き、じっと瞳を晒していると、夫の太くて丸い躯の影が、いつも腰を据えている机の前に揺らいだ気がしたのだった。

大きな机は祥二が古道具屋で見つけてきたという自慢の代物だった。太い竹を脚にして漆塗りの台が乗ってい

るだけの、殺風景な座敷机だと加奈子は思ったが、おまえさんにこの骨董の味がわかるかい、と祥二は上機嫌であった。凝り性の彼はその机の上で釣りの仕かけもよく作っていた。ヘッドホーンを耳に当てレコードも聴いていた。釣雑誌に投稿する原稿も書いた。その間中、机の上にものが散乱していた。神経質に似合わず整頓の苦手な性であった。

だが、加奈子は暗さを嫌い、自由にものの置場所を変える祥二と反対で、その部屋に坐っているだけで落着きを失った。自分のものといえば、鏡台が一つ置いてあるだけであったが、その前の窓ぎわで顔を整えている時など、鏡に写る雑然とした室内が眩しい光線に浮き上がって、妙に白々と華やいで見えるだけで、かえって侘びしさが胸に湧く。四十を越したとはいえ、趣味が多くてそれも一通りのうちこみかたでない祥二の燃えようが、加奈子の思惑をよく捕えた。

自分一人が日常の、白んだ光りの中に置き去りにされているような心もとさだ、と加奈子は思った。モーツアルトに聴き入り、半眼で宙を見つめている祥二や、にぎにぎしい部屋の散らかりようを見ていると、自分を包んでいる周囲に、なんの手応えもないのを加奈子は感じる。空気のざわめくことのない家内の静けさが、躯の中に沈みこんでくる。それだけなら子供のいない家庭だから、と諦めもできた。が、祥二を見ていると、あまりの屈託のなさに、わけのわからぬ腹立ちが起こってくる。そんな鬱屈さえ、単調な日常の流れは、曖昧になしくずしに、いつしか呑みこんでゆく。

休暇も期限ぎれの時期になると、加奈子はそんな想いを、過去何回味わっただろう、とよく自分をふり返ってみた。

最初の頃こそ、夫が家にいる珍しさもあり、目が会えば意味のない微笑でも返ってくる、その夫婦の融合感を、不思議な思いで胸を和ませていた。それが二か月も過ぎると違ってくる。

人間の馴化が、ある日突然方向を変える時、その原因を分折したところで、大した事件があるわけではないのをわかっていながらも、昨日に続く今日の想いが、自分の胸の中で様相を一変しているのに、加奈子は何度も驚いたものであった。それが自分を痛めつける想像になった。

乗船命令の電報が早く来てくれないか、と思ったりする。或は、見知らぬ女から、夫宛に優しい文字で手紙が来ないかな、と考えたりする。それとも祥二の隠し子をつれて、やつれた女が玄関を訪づれる、というさまはどうだろう、と想像する。

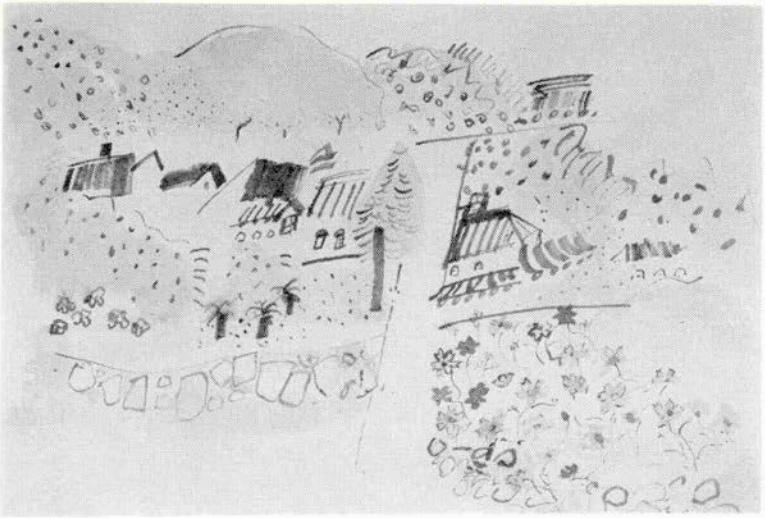
だが、それだけは望めそうもない妄想だった。不妊の因は加奈子にはなかった。何度もの診察でたしかめていたし、その結果、祥二の先天的な原因だろう、と遠い昔にもう諦めていた。

加奈子は何か月ぶりかで整頓された祥二の部屋から、思いきって鏡台を次の間へ移した。

そこは昼でも電灯のいる陽のさしこまない部屋であったが、加奈子にとっては一番寛げる場所であった。祥二のいる時でも、ぽつぽつは手がけていた内職の和裁仕立てが、明日から加奈子の大半の時間を奪うことになっている。そのこんもりとした、風呂敷に包まれた反物の山を見ながら、加奈子は思ったことがあった。祥二はあれだけ丹念していた趣味の用具一切を家に置いていっている。

船員の生活などというものは、仕事と休息が昼夜の別なくこまぎれで、自分一人に還る時間の感じは希薄だということは知っていた。

機関長としての彼が、エンジンルームで重油にまみれた後自分の部屋に帰り、そそくさと入浴を済まして仮眠するのと食事の間だけ、一人っきりになることはあっても、中近東航路を辿って船が走っている間は、エンジンの震動に身を委せながら、機関員への指示に注意をとられている仕事の連続なのだ。働きと家とが、これほどは



っきり区別されている職業は数多くない。船にいる間中時間に縛られて、休暇になればやりたいことをうず高く胸に積らせていただろう祥二が、妻への躯の飢渇も満たされた後、それ以外の充実さを欲して、いつも何かにしやぶりつくような眼をして浮わついている。自分の想いのままに女房を動かそうとする。加奈子の仕立ての内職を断ってしまえ、などとわがままをいう。が、今となったら、祥二の気持もわからなくはない。

離れたとたんの思い遣りに加奈子は苦笑した。それでも淋しさより、久しぶりの鎮まった空気や家中の整頓が気持ちよかった。解放感もあった。外は小春日和の穏やかな日ざしが柔かく拡がっている。温かそうな光りを全身に浴びて、行先も決めず歩いてみたい、と思った。

加奈子は、石畳に響く自分の靴音を聞きながらいくらか後悔していた。坂道の通りに並ぶ家並みは、建設会社のPRのパンフレットの口絵のように、規格的な洋風造りが続いていた。昔、荒れた石垣の家々を、どうして興味深げに覗き見して歩いたのか、記憶は薄れていた。

手さげ袋をぶらつかせて、前かがみに躯を傾けながら石畳道を登ってゆく加奈子の眼を、よく惹きつけた大きな石垣の家があった。加奈子の腕では抱えられそうにもない、青ずんだ石が重ねられてあるその屋敷跡に、おびただしい数のコスモスが乱れ咲いていた。

花はお互いが優しげに絡みあい、背高の細い茎はひょろりと伸びて、淡色の儚なげな花びらを支えていた。風の強い夕べなど、根こそぎ倒れていないだろうかと、加奈子は心配したが、今度通ってみると、花の群落は健気に身を護ったあとのように、顔を触れあい、秋の昼下りの明澄な光線の中で、静かな表情を漂わせていた。

モンペ姿の主婦が、レンガのかまどで夕食の用意の煙をたてている傍の、微風に揺らいでいる一群れの花を見ている加奈子の胸に、少女らしい感傷があった。荒れ地、焼け跡は食傷するぐらいに見馴れていた。そんな殺風景さに馴れた眼に、何十ともしれぬ白と淡紅色の一抱えの花の群落が、その姿の頼りなげな風情に似合わぬ、奇妙な力強さを感じさせるのが不思議であった。父が一年越しの病床で、死期の近づいてきているのを察知していた加奈子に、コスモスの花の光景が、瞳を凝らさずにはおけない心情を誘ったようだった。加奈子は、赤茶けた水道管が、蛇腹のように曲りくねって頭をもたげ、弛んだ蛇口が、深閑とした庭の空気に、水滴の音を響かせ

ていた屋敷跡を思い出した。

今、そのあたりと思われる道の傍の洋風の門は、目の高さ以上にブロック塀で遮ぎられている。枝を伸ばしたヒマラヤ杉が加奈子を見下ろしていた。同じ敷地に建て直された家かもしれないと思っても、もう整然とした門構えのその庭に、季節とはいえ、まさか野性じみたコスモスの花が見られるとは思わなかったが、加奈子は自分でも気づかぬ間に、ヒールの爪先に力を入れて、上段のブロックのくり抜き模様の穴に瞳を近づけていた。

その時だった。弾みをつけて馳け降りる靴音が石畳を鳴らした。加奈子の脇を空気が動き、赤い色彩が早い速度でリズムをきざんで浮き沈みした。加奈子の瞳が、相手の赤いセーターを捉えた時、その娘の胸に飛び踊っていた長くさりのペンダントが、一つ大きく弾んでから、薄い胸の谷間で揺れていた。衿足に沿って刈られた首すじが、なだらかなV字型の生えぎわに整った、少年っぽい骨ばった躯の娘であった。閉じつぐんだ口もとが強く噛みしめられているようすに、加奈子はふっと、とまどいを感じた。見透かすような上目使いの視線は、加奈子をいぶかしがっているようでもあり、咎めているようにも見えた。

斜めに向き直った姿勢のままの少女を、傾きかけた西陽の逆光がくるみこみ、栗色にヘアダイされた短かい頭髪に、透けた金茶の光線が跳ねていた。

「虫やよ」

嗄れた声が薄い唇から飛びだした。少女はショルダーバックの吊り紐を乱暴なしぐさで肩にほうり上げ、加奈子があっけにとられている間に、素手とは思えぬ力強さでスーツの肩を斜めにはたいた。

「いた、いた、これよ」

いきなりコンビシューズの厚い靴底をとんと踏みおろし、首をかしげて加奈子の眼に、白い小粒の歯並みを見せてきて笑った。まるでそれを楽しんでいるように、ゆっくり靴底をしごき、スカートの中のよく伸びた脚を屈折させたが、執拗に続く動作に思わず加奈子は声をかけていた。

「もういいでしょう、やめて」

踏みつけられて白い内臓を押しだし、透き通った漿液を滲ませて、ぺしゃんこになった毛虫のようすを想像しただけで、下肢がこわばるのを感じ、加奈子は嫌悪から目を閉じていた。少女は加奈子の言葉に細い眉をしかめた。が、すぐ相手の注意を無視して、繰りかえし靴底を石畳になすりつけた。もうその頬に微笑の影は見られなかった。禁止されて、かえっていたずらをむきになってやる、子供の表情だった。

加奈子は黙って歩きだした。切れ目なく下の辻まで続いているブロック塀や、石垣の間に、人影は一つも見えなかった。淀みかけた夕暮が加奈子の眼に、ひび割れのように見える敷石道を残照で染めていた。光と風が躯を包むのを感じながら、それと同時に、加奈子は自分の背中を射してくる娘の強い視線を覚えた。対象物を見つけた時の、相手の動きをうかがう猫のように、冴えて据わった眼の光りかたが、たしかに自分を追ってくる。衝動的に馳けだしたい気になり、加奈子は後をふり向いた。思いがけない近さに、小さな顔を見つけて加奈子の胸が波立った。少女は自分と同時に歩きだしたらしい、と気づいたが、それにしても巧みな足音の重ねかたに、加奈子は陰微な気味悪さを感じた。が、走りだすのも大人気なかった。加奈子は相手にかまわず再び歩きだした。閑静な道に、固い二人の靴音が、歩調を合わせたようにぴったりと重って響く。加奈子は厭な気分になり、歩幅を乱してみた。後の靴音がすぐ投げやりな響きに変わったのを耳にすると、加奈子は突然のように怯えを感じた。たかが、十五、六の小娘だと思っても、肩の高さ以上の傾斜に従いてきている少女が、ふいに背後から飛びかかってきそうな姿勢をとっている気がして、冷たいものが背すじを走った。精神分裂者？　という疑惑が頭を掠めて過ぎた。

（つづく）

世界の福祉施設

―― 欧米の心身障害者を訪ねて ――

橋本　明著　<カラー８ページ、本文320ページ、定価　1,000円>
<社団法人家庭養護促進協会事務局長>　送料 200円

●福祉時代の幕開けです。あなたも一冊ぜひどうぞ！

主な内容
- 神戸からシアトルへ
- クライシス・クリニック
- グッドウィル・インダストリーズ
- 里親発見活動
- フォースターグランドペアレント
- ファーストアベニュー・サービスセンター
- ボランティア・ビューロー
- 病院におけるボランティア活動
- レニア・スクール
- アメリカのグループホーム
- 社会福祉とPR活動
- 砂漠の中の老人の町
- ボーイズ・タウン
- パーキンス盲学校
- スポック博士の子供博物館
- アビリティーズ
- ロンドンのバーナードホーム
- 奇蹟の町・ルルドを訪ねて
- コペンハーゲンの老人の町
- ベーテル――西ドイツの障害者の町（ドイツ）
- ヘット・ドルプ――未来を拓く（オランダのコロニー（オランダ）

各書店で好評発売中！

振替口座　神戸四五一九六

お申込みは月刊「神戸っ子」編集部まで。神戸市生田区東町113の１　大神ビル７Ｆ　ＴＥＬ(331)2246